『和漢朗詠集』の撰集意識について

――「蛍」をめぐって――

奥村郁子

一、はじめに

『和漢朗詠集』（以下『朗詠集』とし、引用は日本古典文学大系による）の成立した十一世紀の初頭は、藤原道長が栄華を極めていた時代であり、そのうえ、『朗詠集』の撰者、藤原公任は、当代においてはもちろんのこと、後世にまでも名声を博した博識多才の文人貴族である。したがって『朗詠集』は、まさに王朝藤原文化の、ひとつのピークをなすものといってよいだろう。

『和漢朗詠集』の「和漢」については、現在する最古の注である『和漢朗詠集私注』の序文には、次のようにある。

倭者本朝也。本朝以歌述其懐。漢者唐家也。
唐家以詩彼志。

これによれば、「和漢」とは本朝と唐家、すなわち日本と中国のことであるが、「以歌述其懐」「以詩言彼志」とあるところからすると、本書においては和歌と漢詩を指すと考えた方がよいだろう。そして実際、和歌と漢詩をテーマごとに組み合わせて並べるという形態そのものが、当時の文学作品の中にあっては珍しく、『朗詠集』のもっとも顕著な特徴であることは確かなことである。しかし、和歌と漢詩を並べた作品というのであれば、『朗詠集』以前にも、菅原道真の『新撰万葉集』や大江千里の『句題和歌』があった。ただここで『朗詠集』がこれらの作品と違うのは、これらが、ある和歌や漢詩の秀句にあわせ、新たに詩歌を創作して組み合わせたのに対して『朗詠集』では、すでに文学作品としてある和歌や漢詩文の佳句を組み合わせ、編集したという点であろう。それも、当代きっての文人貴族であり歌人としても指導的立場にあった公任のことであるから、ただ漫然と和歌・漢詩句を並べたとは考えにくい。ひとつひとつの作品の選択・組み合わせから配列にいたるまで、そこに何らかの公任の意図が働いていたであろうことが、当然予想されるのである。しかも、『朗詠集』の場合の和漢並列という形式は、のちに藤原基俊が、これにならって『新撰朗詠集』を編集したのとは違い、これより前に規範とすべき作品はなく、公任によって創り出されたと考えられる新しい形式であるのだから、なおのことであろう。

編纂作業の過程のなかに、撰者の意図が反映されることについては、『古今和歌集』の構造に関する諸論文[1]を挙げるまでもないが、『朗詠集』の場合もまた同様であると考えてよいであろう。そのうえ、『朗詠集』には、撰者公任の自作がほとんど入集していないので、撰集の意図は、集の編纂態度を通して読み取る以外にない。そこで本稿では、公任がいかなる意図をもってこの『和漢朗詠集』を撰したのかという問題について、集の構造などを手がかりに考察することとしたい。

二、『千載佳句』との比較

『和漢朗詠集』の撰集に対して、大江維時撰の『千載佳句』[2]が、大きな影響を与えたであろうということは、山田孝雄氏、金子彦二郎氏、川口久雄氏などによって、すでに指摘されているところである。[3]実際、両者を比較してみると、『朗詠集』所収の七言二句の唐家佳句一八一首のうち、一四九首までが『千載佳句』と重なるのであるから、これが、『朗詠集』におけるもっとも重要な原拠であったことは、疑うべくもないことであろう。しかし、やや詳細にみると、両者の間には単なる影響被影響関係にあるというだけではすまされない、いくつかの明確な相違点も存在することに気付く。

まず第一に、両者の構成について比較してみよう。『朗詠集』が『千載佳句』を原拠とし、多くの句をそこから採ったことについては、前述のごとくであるが、部類項目に関しても、類似するものまでも含めると、『朗詠集』の項目の一二五項目中およそ七〇項目にわたって重複しており、この点でも、両者の関係が非常に深いことがうかがわれる。しかし一方、それらの項目をいかに配列するか、また、

『千載佳句』		『初学記』	
四時部	立春・早春・春興　他	歳時部	春・夏・秋・冬　他
時節部	元日・寒食・三日　他		元日・人日　他
天象部	月・風月・感月・雨他	天部	天・日・月・星　他
地理部	山水・山中・泉　他	地部	総載地・総載山　他
人事部	丞相・将相・尚書　他	人部	交友・離別　他
宮省部	禁中・秘書相　他	職官部	秘書監・秘書丞　他
居処部	居宅・隣家・旧宅　他	居処部	都邑・城郭・宮　他
草木部	水草・水樹・梅　他	宝器部 花草附	蘭・菊・芙蓉　他
		果木部	李・桃・桜桃　他

各項目のなかをいかに構成するか、という段階になると、かなりはっきりした相違を見ることができる。

『千載佳句』の部類項目について金子彦二郎氏は、当時伝来していたであろう、唐人による佳句選の体裁にならったものではあるまいかと推論しておられる。[4]残念ながらそれらの書物は実物がつたわっておらず、推測の域を出ないのであるが、『千載佳句』の項目が中国的なものであったことは、『初学記』などの類書との類似によって明らかであると思われる。　前の表は、『千載佳句』の一部と『初学記』を、部類項目について比較したものであるが、細部に若干の相違はあるものの、基本的な部類意識という点で、両者はたいへんよく似ているといってよいであろう。すなわち、『千載佳句』は、日本人である大江維時の手に成った佳句選ではあるが、白居易を中心とする唐家の佳句を、中国の佳句選または類書にならって編集したものであり、基本的には中国的な部類意識によって構成されていると考えられるのである。

類書とは、前表にあげたような項目ごとに、古典文献の中の関係記事を集めて載せ、そのあとにそれらを題材とした詩賦をあげたもので、大陸との交流によって日本にももたらされ、上代人あるいは平安朝貴族の間で「述作のために最も便利な参考書」[5]として、詩作の際の引用や典拠の索捜に活用されたものである。もちろん維時の時代においても、これらの漢籍の典拠を重んじることに変わりはなかったから、『千載佳句』がその構成や内容において類書の影響を受けていた可能性は高いと思われる。しかも一方では、白氏文集がわが国に渡来し、この書が、当時の文人たちにもっとも尊重され、愛好される書物となっていた。そこで、白詩を中心とする『千載佳句』が、日本人の詩作の参考書として、類書的に利用されたということは、おおいにありうるのであり、撰者維時も、ある程度それを予想していたであろうということは、その類書的な配列よりうかがわれ

るのである。（ただし、宮廷関係部門の偏重など『千載佳句』独特の特徴と見られる部分も、一方では指摘されている。）(6)

これに対して、『朗詠集』の部類項目がどのようになっているか見てみよう。

前掲の『千載佳句』の構造と比べると、『朗詠集』の構造は、基本的な部分で大きく相違していることがわかるであろう。まず、集全体が上巻と下巻に大きく二分され、上巻には四季の諸項目を、下巻には雑として、風・雲以下の諸項目を配している。すなわち、『千載佳句』では大きな項目をなしていた時節部が、『朗詠集』上巻・四季の各部のなかに、おなじく地理部・人事部などが、下巻雑部のなかに組み入れられており、また、天象部と草木部についてもとくに項目として独立させず、各小項目が、適宜、四季・雑の五大項目のなかに配置されているのである。『千載佳句』が類書的な配列をとり類書的な利用方法も行われたであろうことについては、前に述べた。ところが『朗詠集』においては、『千載佳句』が非常に深い関係が認められるにもかかわらず、『千載佳句』の基本的な編集方法であるこの類書的配列を、全面的には踏襲していないのである。

上巻				下巻
春	夏	秋	冬	
立春・早春・春興・春夜・子日・若菜・三月三日付桃・暮春・三月尽・閏三月・鶯・霞・雨・梅・紅梅・柳・花・落花・藤・躑躅・款冬	更衣・首夏・夏夜・端午・納涼・晩夏・橘花・蓮・郭公・蛍・扇	立秋・早秋・七夕・秋興・秋晩・十五夜・月・九日・菊・九月尽・女郎花・萩・蘭・槿・前栽・紅葉・落葉・雁付帰雁・虫・鹿・露・霧・擣衣	初冬・冬夜・歳暮・炉火・霜・雪・氷付春氷・霰・仏名	風・雲・晴・暁・松・竹・草・鶴・猿・管弦付舞楽・文詩付遺文・酒・山・山水・水付漁夫・禁中・故京・故宮付破宮・仙家付道隠士論・山家・田家・隣家・山寺・仏事・僧・閑居・眺望・餞別・行旅・庚申・帝王付法皇・親王付王家・丞相付執政・将軍・刺史・詠史・王昭君・妓女・遊女・老人・交友・懐旧・述懐・慶賀・祝・恋・無常・白

和歌集の部立は、一般に、四季と恋とにもっとも重点がおかれ、その他の部立は、和歌集の規模に応じて、適当に決めることができるものであったようである。たとえば、『古今和歌集』をはじめとする勅撰和歌集では、比較的細かく部立が立てられるが、集中で大きな比重を占めているのは、四季と恋であり、雑歌がそれに次いでいる。これに対して、公任によって編まれ、『拾遺集』のもととなったとされる『拾遺抄』では、四季、賀、別、恋、雑という、やや大雑把な部立構成をとっている。そして、同じく公任撰の、もっと小規模な秀歌選である『金玉集』と『深窓秘抄』の構成は、四季、恋、雑であり、いずれも、四季以外の部立をひとまとめにして雑とすれば、そのまま、朗詠集の部立の構成と一致するのである。とくに『金玉集』と『深窓秘抄』は、規模的にも内容的にも、『朗詠集』所収の和歌に近く(8)、『朗詠集』を構成するにあたっては、これらの秀歌選にみられるような、和歌集的な部類意識が、その基本となっていたと思われる。そしてこれは、前にみた『千載佳句』の、中国古典文学を対象とする類書的な部類意識とは対照的な、日本的部類意識といってよいであろう。

『千載佳句』と『朗詠集』の部類項目の構成の相違から、両者における部類意識の相違について考えてみたが、この違いはまた、個

個の項目のなかにも表れている。前に『千載佳句』所収の佳句のなかから、『朗詠集』に採られたものが多くあると述べたが、それらの佳句が入れられている項目を調べてみると、同じ句でありながら必ずしも同じ項目に採られているとは限らないのである。例として共通する句を比較的多く持つ「春興」「秋興」の二項目について、その関係を見てみよう。

（『千載佳句』）		（『和漢朗詠集』）
春興三八	―	柳一〇四
春興四二	―	春興二〇
春興四六	―	柳一〇二
春興四九	―	花一一四
春興五〇	―	霞七五
春興五一	―	鶯六六
春興五五	―	雨五五
春興七三	―	春興一九
秋興一六二	―	落葉三〇八
秋興一六四	―	秋興一六四
秋興一六七	―	蓮一七五
秋興一七二	―	蛍一八七
秋興一七五	―	雁三一九
秋興一七七	―	秋興一七七
秋興一七九	―	橘花一七一
秋興一八五	―	雁三一八

こうしたことが起こるのは、『千載佳句』と『朗詠集』とで、部類項目に対する見方が異なるためであろうと思われるが、その違いのなかにこそ、撰者公任が『朗詠集』を編纂するにあたっての、独自の意図が反映されていると考えてよいではないか。

先に、『千載佳句』の部類意識は類書的であると述べたが、類書は、項目ごとに関係記事と詩賦を集めて載せ、詩作の参考にした書物であるから、その部類の仕方は、詩題的であるといってよいだろう。それに対して、『朗詠集』は、前掲の比較によってもわかるとおり、『千載佳句』と比べ、より具体的な項目が多い。これは、漢詩と比較すると、一首の長さが短く即物的な詠み方をすることが多い和歌の性質に近く、『朗詠集』の和歌集的な部類意識の表れであろう。すなわち、『千載佳句』の部類項目を詩題的であるとするならば、『朗詠集』の部類項目は、歌題的であるということができるのである。同様のことは、つぎの例においてもみることができる。

（『千載佳句』）		（和漢朗詠集）
早春三	―	鶯六五
春興五一	―	鶯六六
春遊八五三	―	鶯六七
山居九九三	―	鶴四四五
幽居一〇一六	―	鶴四四六
鶴六八〇	―	鶴四四七

これらは、前掲の「春興」「秋興」の例とはちょうど逆の関係であるが、両方の部類項目を見ると、やはり、『千載佳句』が詩題的であるのに対し、『朗詠集』は歌題的であるといえよう。

このように、『千載佳句』と『朗詠集』を、集の構成と部類項目の性格について、それぞれ比較してみると、前者の部類的構成および詩題的項目に対して、後者の和歌集的構成および歌題的項目というように、両者の相違点が、和漢対照的に表れているといえる。すなわち、『千載佳句』は、唐詩の佳句の撰集であるゆえに漢的であると

いうだけでなく、構成・部類項目においても、中国的要素が強いが、一方の『朗詠集』は、日本人の手に成る佳句に秀歌をならべて載せることによって、佳句選のなかに和の要素を取り込み、さらに、構成や部類項目にも、日本的要素を強く打ち出しているのである。

さて、このような『朗詠集』の編纂方針というものは、おそらく当時の文壇（詩壇）において、画期的なことだったであろう。だがこの日本的要素を強く取り組んだ編纂方針によって、外国文学として受容してきた漢詩文の佳句選を編むことのなかにこそ、撰者公任の意図が秘められていると思われるのであり、以下の章では、このことについて、さらに具体的な例を取り上げて検討してみたい。

三、『朗詠集』「蛍」をめぐって

前章では『千載佳句』と『朗詠集』を、その構成と部類項目について比較し、両者の関係と、傾向の違いについて考察したが、両者には、季節観についても食い違う部分がある。すなわち、前章でも一部触れた、両者に共通する佳句で、それぞれ部類された項目が異なるもののうち、季節までも異なるものが九首もあるのである。そこで本章では、そのなかから「蛍」の項を取り上げ、季節観の問題を中心に考えてみたいと思う。

『朗詠集』において「蛍」の項は、上巻・夏の部に配置されており、『千載佳句』からは晩夏一四〇（『朗詠集』蛍一八六）と秋興一七二（『朗詠集』蛍一八七）の二首が唐詩の佳句として採られている。ここに、『朗詠集』の季節と矛盾する「秋蛍」が見られるのであるが、これについて検討する前に、まず、和歌や和文に現われた蛍の用例から、平安時代における日本人の蛍に対する季節観を見ておくことにしよう。

平安時代の文学に、蛍はしばしば登場する素材であるから、それらを通して、当時の人々が、蛍をいつごろの季節の景物ととらえていたかを知ることができるのだが、なかでもそれを端的に表していると思われるのは、『朗詠集』蛍一九一の和歌、

つつめどもかくれぬものは夏虫の身よりあまれるおもひなりけり

にも見られる「夏虫」という蛍の別名であろう。夏虫とは、とくに蛍に限った呼び名ではなく、蛾・蝶・蟬などをさす場合もあるのだが、この和歌の夏虫が蛍であることは、『後撰和歌集』夏二〇九に採られている同歌の詞書に、

桂のみこの蛍を捕へてといひ侍りければ童のかざみの袖につつみて

とあることによって明らかである。すなわち蛍は、当時において、少なくとも夏の虫のひとつとして人々に認識されていたのである。そしてこのことは、平安朝に行なわれた多くの歌合のなかで、夏の歌として蛍が詠まれていることによっても知られる。たとえば『古今和歌集』恋五六二の、

ゆふされば蛍よりけにもゆれどもひかりみねばや人のつれなき

という歌は、『古今集』では恋の歌として入集しているが、寛平御時后宮歌合や(9)、これをもとにして編まれたと言われる『新撰万葉集』では、夏の部に入っており、この歌が、もとは夏の歌として詠まれたということを示している。また、正暦四年五月五日東宮居貞親王帯刀陣歌合に、藤原道綱母が詠んだ、

五月雨やこぐらき宿の夕されを面照るまでも照らす蛍か

という歌や、長元八年五月一六日関白左大臣頼道歌合に、赤染衛門の詠んだ、

名にたてる五月の闇もかなりけり沢の蛍のまがふ光に

のように、「五月雨」や「五月闇」とともに詠まれることも多かった。このように、蛍を夏の景物とすることは、『朗詠集』成立以前の平安朝文学に、すでにあったと考えられるが、つぎに『朗詠集』の成立

と同時代であり、公任自身とも交流のあった一条朝後宮の女房文学のなかの蛍の用例について見てみよう。

まず、当時の女流文学の双璧とされる『枕草子』と『源氏物語』であるが、とくに、つぎに挙げる『枕草子』冒頭の一段はあまりにも有名である。

夏は夜。月の頃はさらなり。やみもなほ、ほたるの多く飛びちがひたる。また、ただひとつふたつなど、ほのかにうちひかりて行くもをかし。

ここで清少納言が、四季をはっきりと区別し、蛍を夏の景物の代表として位置付けていることは、注目するべきであろう。

『源氏物語』にも蛍は数例見られる。まず、帚木巻に、

田舎家だつ柴垣して、前栽など心とどめて植ゑたり。風涼しくて、そこはかとなき虫の声々聞こえ、蛍繁く飛びまがひてをかしき程なり。

とあるのは、雨夜の品定めの翌日に、源氏が方違えで訪れた伊予介邸の有様を描いた部分であり、季節は五月雨の候である。また、蛍巻で兵部卿宮が、蛍の光に照らしだされた玉鬘の姿を垣間見たのも

御労の程はいくばくならぬに、さみだれになりぬる憂へをし給ひて（以下略）

とあるのによって、五月であることが知られる。

幻巻には、源氏が眼前に蛍の飛ぶのをみて、亡き紫上を偲んで、長恨歌の一節を口ずさみ、和歌を詠む場面がある。

いと暑き頃、（中略）蛍のいと多う飛びかふも「夕殿に蛍飛んで」と、例のふるごともかかる筋にのみ口なれ給へり。

よるを知る蛍を見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり

この場面は、前後の文脈から五月十日過ぎから七月七日までのことと考えられるが、はっきりした日時は不明である。しかし文中に蓮・蜩・撫子などの夏の景物がみえることや、同じ時に源氏が詠んだ和歌に「わが泣き暮らす夏の日を」とあることから、季節は夏であるとしてよいだろう。ここで、「夕殿に蛍飛んで」という長恨歌の句は、『朗詠集』恋七八二にも入る、

夕殿蛍飛思悄然　秋燈挑尽未能眠

に拠っており、前掲の源氏の「よるを知る」の歌も、『朗詠集』蛍一八七にある、

兼葭水暗蛍知夜　楊柳風高雁送秋

に拠る。この両句の季節については後に検討するが、『朗詠集』所収のこれらの句を通して、漢詩文の佳句が、当時どうように享受されていたかをうかがうことのできる場面である。

このように、『枕草子』と『源氏物語』についてみると、蛍はすべて、夏の景物として登場する。ほかにも中宮定子に仕え、清少納言とならぶ才女といわれた馬内侍の家集には、

またをとづれもなければ、五月つごもりころに

とぶ蛍まことのこひにあらねども光ゆゝしきゆふやみの空

中宮彰子の女房であった和泉式部には、

蛍火はこのしたくさも暗からず五月の闇は名のみなりけり

という和歌が残されている。

以上、平安時代の日本文学に現れた蛍について、見たわけであるが、これらの例から、蛍が和歌や和文に登場する場合、その季節は夏であるといってよいだろう。それも、月がわかるものでは、五月の蛍がほとんどである。これは蛍が、とくに盛夏のものとされていたことを示しており、それが当時の人々の蛍に対する季節観であったと考えられるのである。

それでは、『朗詠集』蛍の項に、『千載佳句』の晩夏や秋興の佳句が採られていたり、『朗詠集』蛍一八八の詩題が「秋蛍照帙賦」であったりするのは、どういうわけなのか。この問題を考えるためには、やはり、中国文学における蛍について検討しておく必要があろう。

蛍に関して、『礼記』月令にはつぎのような記事がある

季夏之月、（中略）温風始至、蟋蟀居壁、鷹乃学習、腐草為螢

［鄭注］皆記時候。（中略）蛍飛虫、蛍火也。

「季夏之月」すなわち六月に、腐草が蛍になるというこの記事によれば、蛍の季節は晩夏ということになる。『朗詠集』蛍一八六が、『千載佳句』では晩夏に部類されているのも、これによるものであろう。しかし、季節が晩夏から秋に移ってもなお、蛍は多くの漢詩文のなかに登場する。それどころか、中国文学では「秋蛍」のほうがむしろ普通であるといえるほどなのである。たとえば、『文選』には、

燿燿粲於階闥兮蟋蟀鳴乎軒屏。　（巻一三、潘岳「秋興賦」）

星火即夕忽焉素秋、涼風振落燿燿宵流

（巻一九、張茂「先励志」）

などと詠まれるが、この「燿燿」とは、蛍の別名である。

また『玉台新詠』のなかにも、巻八、劉邈「秋閨」など蛍を詠んだ詩がいくつか数えられるが、季節はすべて秋である。これは、日中両国の蛍の種類や生態の違いが原因かとも思われるが、ともかく中国では、蛍は晩夏に発生し、おもに秋の夜に飛び回る虫と見られていたようである。類書においてもこの傾向は変わらない。日本にも伝来していた代表的な類書である『芸文類聚』と『初学記』は、それぞれ蛍を一項目として設けているが、両者とも、はじめに前掲の『礼記』月令の記事に触れ、それから蛍を題材とする詩賦をあげている。つぎにあげるのは、その中でとくに季節がはっきりと現れているものである。（引用は『芸文類聚』による）

梁簡文帝蛍火詩日。本将秋草并。今与夕風軽。騰空類星隕。

払樹若落生。井疑神火照。簾似夜珠明。

陳楊縉賦得照映（初学記映作帙）秋蛍詩白。秋窓余照尽。入暗

早蛍来。忽聚還同色。恒然距落灰。飛影黄金散。衣帷縹帙開。

含明自不息。夜月空徘徊。

詩中に用いられている「秋草」「秋蛍」などの語より、これらの季節も秋であるといってよいだろう。また、夏と秋の部類項目についてみると、『芸文類聚』『初学記』ともに、夏の項目で蛍が出てくるのは一首だけであるのに、秋の項目では、『芸文類聚』で六首『初学記』で四首の詩賦に、蛍が登場する。

さらに日本に伝来して以来、平安貴族の間でもっとも尊重され、愛好されていた白氏文集は、そのなかに多くの虫類が読み込まれているが、蟬や蟋蟀に比べると、蛍の用例は多くない。しかしそれでも、それらの季節をみると、詠まれているのはやはり秋蛍ばかりである。前掲の長恨歌の一節にしても、『源氏物語』では夏の場面であったが、長恨歌の中では、この句の直前の「西宮南苑多秋草　宮葉満階紅不掃」という句や、直後の「遅々鐘漏初長夜　耿耿星河欲曙天」という句、そして「秋燈」という語から、秋であることは明らかである。

以上、中国文学に現われた蛍の用例から、中国人の季節観を考察してきたが、この中国文学における秋蛍は、類書や白氏文集をはじめとする様々な漢籍をとおして、作文に必要な知識のひとつとして文人貴族にはよく知られたことだった。たとえば、『朗詠集』一八八・一八九の詩題である「秋蛍照帙賦」というのも、『蒙求』で有名な車胤聚蛍の故事だけではなく、類書のなかに同様の題の詩賦が載っているし（前掲）、天徳三年八月十六日内裏詩合では、「蛍飛白露間」という題で、秋の詩が詠まれている。平安時代の日本漢詩文にみられるこれらの秋蛍は、中国文学を権威ある典拠として重んじ、積極的に模倣しようとした当時の風潮を反映し、中国的な季節観によった結果であると思われる。詩人たちにとっては、たとえ現実の季節と矛盾していようとも、作文の際には漢学の知識を踏まえる方が重要だったのである。その点では、そのような学問・知識にとらわれることの少なかった女房たちが、和歌や物語のなかに夏の蛍を登場

させたのとは対照的だったといえよう。

元来、日本文学は、中国文学の受容・模倣に始まり、つねにその影響下にあったのだが、実際には蛍の例に見られるように、季節観やものの見方にずれのある場合も、少なくなかったはずである。そして、そのような矛盾に対しては、二通りの解決方法がとられたように思う。ひとつは、平安朝の漢詩文のように、中国文学を規範としてそのまま受容し、模倣するやり方であり、他のひとつは、和歌や物語など、中国文学からは比較的自由な分野においてなされたような、日本的感覚によって表現しようとするやり方である。そして蛍の場合は「秋蛍」が前者であり、「夏蛍」が後者ということになる。つまり、漢文学の分野では秋蛍が詠まれ、和文学の分野では夏蛍が詠まれるという、ふたつの平行した流れを考えるべきなのである。

もちろんふたつの流れといっても、同時にあるものであるから、相互に影響しあい、ときには漢文学に夏の蛍が、和歌に秋蛍が詠まれたりする場合もある。『新撰万葉集』上巻・夏には、

夕されば蛍よりけにもゆれども光みねばや人のつれなき

という和歌に対して、

怨深喜浅此閨情。夏夜胸燃不異蛍。書信休来年月暮。千般其望門庭。

という夏蛍を詠んだ詩が付されているし、夏の和歌に「水上夜蛍」「草蛍似露」という句題が付けられた例もある。しかしこの場合、中心はあくまでも和歌にあるのであり、日本的季節観による夏の蛍なのである。逆に和歌に秋蛍が詠まれた例としては、（寛平五年九月以前秋）是貞親王歌合に、

置く露に朽ちゆく野べの草の葉や秋の蛍となりわたるらむ

という和歌があるが、これは明らかに『礼記』月令の「腐草為蛍」をふまえた中国的な秋蛍である。

それでは、『朗詠集』のなかで蛍はどう扱われているだろうか。上巻夏、蛍の項を見てみよう。

一八六　蛍火乱飛秋已近　辰星早没夜初長　元
一八七　兼葭水暗蛍知夜　楊柳風高雁送秋　許渾
一八八　明々仍在　誰追月光於屋上　秋蛍照帙賦
　　酷々不消　豈積雪片於床頭　紀
一八九　山経巻裏疑過岫　海賦篇中似宿流　同然　直幹
一九〇　草ふかくあれたる宿のともしびの風にきえぬは蛍なりけり
一九一　つゝめどもかくれぬものは夏虫の身よりあまれるおもひなりけり

ここには、六首の佳句および和歌が採られているが、唐詩の佳句である一八六は、『千載佳句』晩夏に、一八七は『千載佳句』秋興に所収の句であり、これらが、中国的な季節感によるものであることは、すでに述べたとおりである。また、日本人の佳句一八八・一八九については、「秋蛍照帙賦」という題が、前掲の類書所収の「照帙秋蛍詩」と類似しており、中国的な秋蛍と考えられる。つぎに二首の和歌であるが、一九〇は『親勅撰和歌集』に、一九一は『後撰和歌集』夏に入集しており、どちらも日本的季節観による夏の蛍を詠んだものであることがわかる。そして最後に、『朗詠集』における蛍の項目の位置であるが、上巻四季部・夏のなかに、夏の景物のひとつとして置かれている。これは、日本的季節観と一致させていることになるが、いうまでもなく、この時公任は、中国的「秋蛍」のあり方を十分に承知した上で、蛍の項を夏部に入れたと考えるべきであろう。つまりここには、前章の『千載佳句』との比較においてみられた和（日本）と漢（中国）を対照的に扱う態度が、漢詩の「秋蛍」、和歌の「夏蛍」という形で示され、しかも全体としては和的な

季節観が優先させられているということができるのである。

四、おわりに

以上のことから、『千載佳句』との部類意識の比較、および蛍の項の内容・構成を見るかぎり、『朗詠集』の編纂方針は、必ずしも中国文学だけを至上のものとして模倣するのではなく、漢詩文の佳句に和歌を配し、日本的な部類意識や季節観を取り込んで、前例のない独自の世界を展開しているといえるであろう。はじめにも述べたように、撰者公任の編纂意図の一端を、このあたりに見ることはできないだろうか。

藤原文化の絶頂期に活躍した公任は、三船の才の説話を持ちだすまでもなく、世の認めた和漢兼才の文人貴族であった。ゆえに、その学識と才能を発揮して作られた『朗詠集』が、先行の佳句選の模倣ではない新境地を開くものであったといっても、けっして過言ではあるまい。もちろん当時の文学観からみて、和文学と漢文学を対立的に取り上げたり、優劣をつけたりするものではないだろうが、少なくとも、それまで文学の格としては一歩譲ってきた和文学が、漢文学と肩を並べ得るものであることを示す、これはひとつの試みであったといえるのではないかと思うのである。

もちろん、ここに取り上げたわずかの例だけから、『朗詠集』全体の編纂方針を論ずることができるわけではなく、より多くの項目について、具体的検討がなれるべきであることは、いうまでもない。同時代のみならず後世においてまでも、広く享受され、本書の形態を踏襲する朗詠集も多く作られた、影響力のある作品であるだけに、構成を読み解き、編纂方針を考察する必要があるのではないかと考えるのである。(10)

注

(1) 松田武夫氏「勅撰和歌集の撰述過程に於ける意識の問題—古今和歌集を中心にして—」(「国語と国文学」昭和二十八年一一月)、「古今和歌集四季の部の構造についての一考察—対立的機構論の立場から—」(「国語国文」昭和四七年八月号)など。

(2) 引用は金子彦二郎氏『増補平安時代文学と白氏文集—句題和歌・千載佳句研究篇』による。

(3) 山田孝雄氏『倭漢朗詠集』(岩波講座日本文学)、金子彦二郎氏『増補平安時代文学と白氏文集—句題和歌・千載佳句研究篇』、川口久雄氏『和漢朗詠集』(日本古典文学体系)解説。

(4) 金子氏前掲書、四八一頁。

(5) 小島憲之氏『上代日本文学と中国文学』上。

(6) 金子氏前掲書、四六九頁。

(7) 柿村重松氏『和漢朗詠集考證』、山田孝雄氏前掲書、川口久雄氏前掲書。ただし、山田、川口両氏のように、勅撰和歌集に限る必要はないと思う。

(8) 『朗詠集』との重複歌数は、『深窓秘抄』一〇一首中六六首『金玉集』七八首中四四首。

(9) 以下、歌合の引用は、萩谷朴氏『平安朝歌合大成』による。

(10) 構成や配列などから、撰者の意図を考察した論として、拙稿「『和漢朗詠集』の三月尽と九月尽」(『国文学言語と文芸』91号)、同じく「『和漢朗詠集』—郭公をめぐって」(『古典の変容と新生』)、三木雅博氏「都の月・他郷の月—『和漢朗詠集』八月十五夜部・月部の構成に関して—」(「国語国文」一九九一年第六十巻第四号)などがある。